様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１２８８

研究課題名（和文）高機能自閉症幼児における情動理解・情動表出とアタッチメント対象形成との関連

研究課題名（英文）Understanding, production, and regulation of emotion in children with high functional autism spectrum disorders in relation to the attachment formation

研究代表者
別府　哲（Beppu, Satoshi）

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：２０２０９２０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,200,000円、（間接経費）　960,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は高機能自閉症幼児における情動理解・表出・調整とアタッチメントとの関連を検討した。その結果、以下の３点が明らかとなった。①高機能自閉症児者の情動理解には、情動の意識的処理と自動的処理の２つが存在し、自動的処理に障害特有の問題を持つこと。②高機能自閉症幼児は自己情動表出を弁別的に理解することは可能であること、しかしその表出様式は定型発達児と異なっていること、③高機能自閉症幼児の情動調整不全には、ネガティブな情動の調整不全だけでなくポジティブな情動の調整不全もありこれは障害特有の可能性があること、一方この情動調整不全はアタッチメント対象の形成により、次第に外的調整が可能になることが示された。

研究成果の概要（英文）：This research purposed to examine the nature of the understanding and production of emotion, emotional regulation in children with high functional autism spectrum disorder (HFASD) with relation to the function of the attachment. Results were as follows. (a) Children with HFASD had the conscious emotional processing without the automatic emotional processing, although this was not the case in Typical Development (TD) children. (b) The styles of expressionin children with HFASD were different from that in children with TD, but children with HFASD as well as TD child could distinguish the self-photographs in the viewpoint of the type of emotional expressions. (c) The case study of the boy with HFASD indicated many episodes of the emotional dysfunction. Especially, the one type was the explosion of the positive emotion, for example, joy, happiness, which was the uniqueness of children with HFASD. He became to regulate the emotion through being regulated by the attachment figure.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：高機能自閉症幼児　情動理解　情動表出　情動調整　アタッチメント

１．研究開始当初の背景

本研究課題「高機能自閉症幼児における情動理解・情動表出とアタッチメント対象形成の関連」は、以下の問題意識と仮説をもとに行われた。

自閉症児者における社会性の障害は、従来、心の理論（theory of mind）にみられる認知の問題として扱われてきた。しかし、他者の気持ちを理解しやりとりする社会性には、情動が大きな役割を果たすこともまた事実である。本研究は、この問題意識より自閉症児者の情動の障害を、表出と理解、調整を中心に検討することとした。あわせて情動の発達あるいは障害と関連する要因として、アタッチメント（attachment）を取り上げ検討することとした。

２．研究の目的

本研究ではこの問題意識に基づき、以下の課題を検討した。

（１）自閉症児者の情動理解については、この 20 年間､さまざまな研究が行われてきた。しかしその知見は一致していない。自閉症児者は情動認知に障害は無い（intact）とする研究がある一方、生活年齢や知的能力を揃えた知的障害児者や定型発達児者と比べて情動理解に障害を持つとする研究もみられる。ここではそういった異なる知見を持つさまざまな研究をレビューし、矛盾した知見を統一的に理解する枠組みを検討する。

（２）自閉症児者の情動研究では、情動理解は上記のように一定の研究がされているのに対し、情動表出については、方法論的な課題もあり、まだ十分には研究として取り上げられていない。そこで今回は高機能自閉症幼児を取り上げ、「嬉しい」「悲しい」「怒っている」という情動表出をどのように行い、かつそうした自己表出をどのように理解するかを、自己表情写真を用いて検討する。

（３）自閉症児者の情動を考える際に、彼・彼女らも情動自身は有しているという当たり前の前提を確認することは重要である。そうであるからこそ、（１）や（２）で課題とした情動の障害は、欠損（deficit）ではなく、自閉症児者の情動と定型発達児者の情動のずれ（gap）ととらえるべきである。そのずれを生み出す一因は、他者との情動共有経験の有無にあることが予想される。定型発達児者は他者との情動共有経験を容易に作りやすいのに対し、自閉症児者は感覚過敏一鈍麻や社会的刺激への注意を向ける能力の障害により、情動共有経験を作ることが困難である。それがアタッチメント対象形成の障害、ひいては情動のずれを生み出すことが予想される。今回は、アタッチメントと関連の深い情動調整(安全基地 secure base という概念自身、不快を軽減する機能を有するものである）を取り上げ、情動調整不全とその変容を、アタッチメントとの関連で検討する。

３．研究の方法

上記の（１)、(２)、(３）についてそれぞれ以下の方法で行った。

（１)：これについては先行研究のレビューにより行った。

（２）

対象児：就学前通園施設に通う年長児で、かつ新版 K 式発達検査の発達指数 70 以上、自閉症のハイリスクであることを示す PARS 短縮版・5 点以上の者（以下、ＰＤＤ群）と、同じく発達指数 70 以上であるが PARS 短縮版が 5 点以下の者（以下、非ＰＤＤ群)。

手続き：対象児に個別に会い、「嬉しい」「悲しい」「怒っている」表情と普通の顔をしてもらい、それぞれ写真を撮った。約１週間後、新版Ｋ式検査を施行し、その後で４枚の自己表情写真を提示し、その中で「嬉しい（悲しい、怒っている）顔はどれ？」と尋ね選択をさせた。

（３）

対象児：高機能自閉症の診断を受けた男子Ａ児。5 歳時点で、田中・ビネー知能検査を受け、IQ90 であった。些細なことで、他害やパニックを頻発し、自分の不安や怒りの激しい情動調整不全が特徴であった。

手続き：Ａ児の母親とのカウンセリングを、月２回ペースで行った際の記録のうち、Ａ児が３歳から６歳（就学）までのものを分析対象とした。

４．研究成果

（１）について

情動理解については、それが定型発達児者と比較して障害は無い（intact）とする研究と、遅れや逸脱などの障害は存在するとする研究が混在したままであった。本研究では、この矛盾した結果を統一的に理解するために、情動理解の２つのレベルを仮定することで先行研究を検討し直した。具体的には、情動の意識的なレベルでの処理（意識的処理）と自動的なレベルでの処理（自動的処理）である。その上で、高機能自閉症児は、前者ではなく後者に障害を持つと仮説した。そのように考えれば、典型的な表情をゆっくりと時間をかけて意識的処理する課題では正答できるのに、あいまいな表情を瞬時に理解する自動的処理はうまくできないので誤答することが予想される。これが、矛盾した知見を生み出していると考えたのである。課題をそのように整理分類して先行研究をレビューすることで、情動理解の障害の有無を統一的に説明できることが明らかとなった。

このことは、（ａ）意識的処理が可能であるため、他者の情動を教えればそれを学習することは可能であること、しかしだからこそ周囲の人は高機能自閉症児が情動理解の能力をすでに持っていると誤解しやすいこと、（ｂ）一方、瞬時に他者の情動を自動処理することには困難があるため、日常でのやりと

りでは他者とタイミングがずれたりちぐはぐな関わりになることが多いこと、（３）それが集団での協調性を強調する日本の思春期集団においては特に問題視されやすいこと、（４）その失敗経験が自責感情を引き起こしさらに問題をこじらせやすいこと、を示唆することとなった。

（２）について

高機能自閉症群における自己表情認知：５～６歳の高機能自閉症幼児に、「嬉しい」「悲しい」「怒っている」表情と普通の顔をしてもらい、その写真を約１週間後に４枚同時提示し、表情分類を行ってもらった。あわせて、自閉症度を測定するＰＡＲＳ短縮版と、新版Ｋ式発達検査（特に「表情理解Ｉ」「表情理解Ⅱ」課題）を施行した。実験参加者は、就学前通園施設に通う年長（５歳）児３３名であった。主要な結果は以下の通りである。①自己表情認知得点：正答数がチャンスレベルより高いかどうかを検討したところ、ＰＤＤ群も非ＰＤＤ群も、いずれの表情でもチャンスレベルより有意に高い正答数を示した。②一方、自己表情写真をＦＡＣＳを用いて分析したところ、定型発達児者の表情表出の基準（ＦＡＣＳ）に基づけば、ＰＤＤ群は情動に応じた表情表出はできていなかった。すなわち、ＰＤＤ群は定型発達児者の基準で考えた場合、表情表出にずれが存在するが、しかし表情を弁別して表出しておりその認知は可能であることが明らかにされた。

（３）について

高機能自閉症幼児の情動調整：①情動調整不全のタイプ：定型発達児においてもみられる（ａ）ネガティブな情動（怒りや不安など）の調整不全だけでなく、（ｂ）ポジティブな情動（嬉しい、喜びなど）の調整不全もみられることが明らかにされた。この（ｂ）は高機能自閉症特有の情動調整不全タイプであることが示唆された。②情動調整の発達：Ａ児はアタッチメント対象を形成することにより、まずアタッチメント対象による外的な調整（external regulation）が可能となること、そしてその方略が次第に発達していくことが明らかにされた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

①別府哲、自閉症スペクトラム児における社会性の障害と発達、乳幼児医学・心理学研究、査読無、22 巻、2013、79-90

②別府哲、自閉症スペクトラムをもつ子どもの発達診断の方法論的検討、障害者問題研究、査読無、41 巻、2013、186-193

③別府哲、自閉症児と情動－情動調整の障害と発達、発達、査読無、135 号、2013、66-71

④ Nomura,K., Beppu,S., & Tsujii,M. Loneliness in children with high functioning pervasive developmental disorders, Japanese Journal of Special Education, 査読有、49、2012、645-656

⑤別府哲、コミュニケーションとしての発達障害、臨床心理学、査読無、12 巻、2012、652-657

⑥別府哲、自閉症児者の社会性に関する発達研究の最前線、臨床発達心理実践研究、査読有、６巻、2011、5-10

〔学会発表〕（計３件）

①別府哲、高機能自閉症児における情動調整の障害と発達、日本発達心理学会第 25 回大会、2014 年 3 月 21 日、都大学吉田南キャンパス

②別府哲・水野友有、高機能自閉症幼児における自己表情認知、日本特殊教育学会第 51 回大会、2013 年 8 月 31 日、明星大学日野キャンパス

③別府哲、自閉症児者の支援におけるアタッチメントの意義、日本発達心理学会第 23 回大会、2011 年年 3 月 10 日、名古屋国際会議場

〔図書〕（計２件）

①別府哲、新曜社、乳幼児の社会性・情動発達の障害の障害と支援：自閉症児における研究より（日本発達心理学会[編]「発達と支援」所収）、2012, 362（担当部分 142-155）

②別府哲、金子書房、心の理論と障害（本郷一夫[編]「認知発達のアンバランスの発見とその支援」所収）、2012、239（担当部分 31-58）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

別府　哲（BEPPU, Satoshi）
岐阜大学・教育学部・教授
研究者番号：２０２０９２０８

(2)研究分担者
水野　友有（MIZUNO, Yu）
中部学院大学・子ども学部・准教授
研究者番号：６０３９７５８６

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：